

保育の現場から

「くりかえし」 楽しむという人と

子どもと過ごしていると、よく飽きないなあと思うほど、毎日毎日同じことをくりかえす姿に出会います。砂場で穴を掘っては水を流し、海や川をつくる子、土に水を足し、手のひらで混ぜてぬるぬるを味わう子、それをバケツに入れてチョコレートを

佐々木麻美

くる子、こわれてはまたつくり、こわれたらまた、と泥だんごづくりをする子、ダンゴムシやアリを探す子、空き箱をいくつもつなげてロボットや電車を作る子……など、あげたらきりがなくらいです。でも、いつもそれを見てつきまとう不安あり。

「本当にそれを楽しんでいるの??？」私自身、ちよつぱり飽きっぽい性格だというのと、何か考え出す時のあのエネルギーが好き! というのも、多分に関係していることを自覚しつつ。

家庭とのつながり

三歳年少組の子どもたちが入園してくる時には、今までずっと過ごしてきた家庭での時間を考え、家庭と同じように過ごせるように、温かい雰囲気づくりを心がけます。でも、なかなか家庭と同じようにはいきませんし、どのような環境が子どもにとつてよいのかは、検討の余地があると思いますが、子どもたちは今まで遊んだことがあるものや、触れたことがあるものを見つけてかかります。園庭の滑り台や砂場、園で飼っているモルモットやウサギは憩いの場所となり大人気です。

保育室ではクレヨン・紙・粘土・のり・セロハン

テープなどを常に用意し、何枚も何枚も絵を描いたり、粘土でハンバーグを作ったり、のりで形に切つたものを貼つたり、空き箱をセロハンテープでつないでロケットを作つたりしていました。

年少組の子どもたちが入園してきて、三か月が経つた頃、毎日環境として用意してきたそれらのもので、あまり子どもたちが遊んでいないあとと感知始めました。

マンネリからの脱出!?

ある日、この日は休み明け。どんよりとした曇り空で、うつとうしい感じがしました。朝、ロッカーに顔をうずめて泣いているA子がいました。遊びに誘いましたが、あまりやりたそうではなかったのので、少しでも気分が軽くなるように、私は広告のチラシをくるくるまいて作つた棒にすらんテープを短く切つてセロハンテープでとめ、それを細くさい

て、ひらひらさせてみました。すると、「A子もやる」と言つて、ちよつと気持ちが変わりました。テラスで作っていたので、見つけたほかの子もやつてきて、小さなひらひらとともに、体を動かす子どもたちが出てきました。

私の中では、ちよつとマンネリしてきた遊びに、「あたらしい」ものを取り入れることで、子どもたち（特に、いつもと違い、どこか気持ちが沈んでいたA子）の興味を刺激し、遊びたい気持ちをくすぐつたら、きつと楽しめるに違いない、そんな思ひでいました。今思えば、なんてその場しのぎな考えなんだろうと、自分の浅はかさに気づき、恥ずかしくなります。

しかし、その時は、そんなことは思わずに、翌日も、「作りたい」と言う子と一緒に同じものを作つて遊びました。そして、週末になり、学年会で翌週の計画を立てる日になりました。

先輩の先生のひとこと

フリーとして、年少組の日々の保育も一緒にしている先輩ですので、何かしら感じるころはあるのだと思いますが、あまり多くは語りません。言いつらいのかな……と思うところもありましたが、とにかくいろいろな話を伺うようにしていました。その日聞いてみると……。「次から次へと（提示する活動が変わつて）めまぐるしい」「私はもつと粘土、のりで勝負するよ」という話でした。「粘土にのりですか……（これ以上、どうやったら子どもたちと楽しめるのだろう……）」「もつとたくさん手を使つて、粘土をぎゅつぎゅつとつかんだり、のりでべたべたしたりね」。それを聞いて、同じ素材でも私は、楽しみ方の視点が違うこと気づきました。

それまで、のりも粘土も子どもたちに環境として用意し、かかわってきましたが、私はいつも、何か

「かたち」にすることに方向づけしていたように思えます。今、子どもたちが何を楽しんでいるのか、何を経験しようとしているのか、そして、何を子どもたちに体験してほしいのか、という保育の基本的なことが抜けていることに気づきました。そして、何よりも自分がそのような楽しみ方をしていないことに気づきました。

びりびり、こねこね、べたべた

そのことを学年会で話すと、「あ」と私も同じというような、同じ年少組の先生の声。「そうだよね……」「まだ粘土かゝまだのりかゝ、私たちでできるかな……。でも大切だと思うから、やってみよう」。そんな話になり、翌週から「くりかえし」樂しめるように、そしてそれを見た子が次にやってみようと思えるように、いつでも出せるように用意しておくことにしました。

そうすると、今までマンネリに見えたものが、不思議とまた新しい息を始めたように感じました。

何を作るわけではないけれど、粘土をころころと手で転がしたり、手のひらでぎゅつとつぶしたり、小麦粉粘土をねちよねちよこねたり、びよーんとひっぱたり、ふわふわになつたらそつとさわってほっぺにあてたり、のりもたくさん手にとつて、両手を合わせてぐによくによしたり、それを紙になすりつけて、そこへびりびりとさいた紙をのせてみたり、びりびりしたいろいろな色の紙はお料理の材料にもなりました。

外も中も同じ

改めて、自分の子どもへのかかわりを考えてみたところ、外遊びといわれるものは、「かたち」のないう「くりかえし」を比較的ゆつたり見守れます。しかし、室内となると、どうしてか、「かたち」にし

ようとしてしまうことに気づきました。用意する素材からして、造形的なものだからか、何か「つく」という意識が働きがちなのかなとも思います（もちろんままごとや、積み木や絵本も子どもたちが大好きな遊びのうちですが、それらは、素材自体を楽しむものとは違うので、ここでは分けて考えたいと思います）。

「つくる」ことへ意識が向きがちなものも、園庭の砂や土、水のように、まずはその素材自体をからだ全体でじっくり味わい、自分のものにしていく体験をみんなにしてほしいなあと思うようになりました。

「かたち」あるものへ

二期期になると、子どもたちは新しい姿を見せてくれるようになりました。自分の経験の中から、これを作りたいと言ってきたり、友達と同じものがほしいということも増えました。周りにも目が向いてき

たようで、ぐっと経験の幅が広がり、それが子どもから子どもへ伝わるようになってきました。

そうになると、遊びも人のかかわりも複雑になっていき、原初的な遊びは、少

づつ「かたち」になっていきました。ころころまるめた粘土がおだんごになり、それを買いくる子どもが出てきたり、粘土をぎゅつとお弁当箱につめてピクニックに出かけたり、おなべにつめた紙のごちそうも、レストランに出されたり、砂場には大きな川ができるようになりました。「かたち」にならない遊びと人とがつながって、遊びが少しずつ「かたち」あるものに変わってきたのだと思います。原初的な体験はどこかへいってしまったわけではなく、見えにくくなったのだと思います、それはいつで



も帰れる場所として、しつかりそこになくてはいけないのでしよう。

見えないいつながら

三人の子どもとお面を作っていた時のこと。お面にするには大きい紙を私が手渡ししてしまい、どうするかと思つたら、B君は、まずお目当てのうさぎを描き、それからもう一つ何か描き、そしてはさみでそのまわりを切りました。それから、残つたいびつな形の紙に、まるをいっぱい描きました。そして、私にその三つをお面にするためにお面のベルトがほしいと言うので渡すと、ホチキスでカチカチと止め始めました。

いくつ針を使ったか数えられないほど、かっちりとは止まっていたので、よくやったなあと感じつつ、あのまるのお面が気になり、「これは何のお面なの?」と聞きました。すると「シャボン玉だ

よ!」という答え。貸してくれると言うので、頭につけました。すると、紙がいびつなだけに、だらんとしてしまいました。何だかそれにつられて、くるくるふわふわ動いてしまいました。「なにしているの?」と聞かれるので、「シャボン玉になつてるよ」と答えると、そばにいたC君がにこつと思わず笑っていました。あまり自分から気持ちを表さないうC君だけにそれだけでとても嬉しかったです。

小さな紙の切れ端もとっておいてびりびりしたと、B君はほぼ毎日水道の水をじゃーっとひねり、びしょびしょどろどろになつて気持ちよく遊んだこと、そばにいる友達を心地よいと感じていたこと……。何かがどこかでつながつていると信じて、「かたち」のないものを大切に続けることで生まれる「かたち」あるものが、年少組にとつて、とても大切なのだと思いました。

(大和郷幼稚園)